

委託事業実施内容報告書

平成25年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業 【地域日本語教育実践プログラム(A)】

受託団体名 国立大学法人 名古屋大学

1. 事業名称 地域住民としてのライフステージを支える生活日本語教室運営事業

2. 事業の目的

本事業は、豊田市内に在住、在勤の外国人が地域住民として暮らしていくために必要な基礎知識と生活日本語を運用する能力を身につける機会を提供することを目的とする。同時に、それら外国人と接する機会がある日本人住民にも相互理解のためのやさしい日本語を身につける機会を提供し、その機会を通して、日本人住民だけではなく外国人住民にとっても住みやすい地域社会を構築することを目的とする。本事業で運営する日本語教室を「地域住民としてのライフステージを支える生活日本語教室(以下、「地域住民のための生活日本語教室」)」と呼ぶ。

3. 事業内容の概要

第一回運営委員会及び意見交換会

5月末日に、公開形式で、第一回運営委員会を開催し、事業概要、事業運営方針の説明を行い、運営委員だけではなく、参加者からも提案、意見を募った。

・「地域住民のための生活日本語教室」教材作成者・指導者育成研修会

7月～9月に、モニター学習者を同伴した域内外国人の状況、リソース等の把握、体験・行動を通じた接触場面の言語運用資料の収集、収集資料の分析、具体的な日本語教育プログラムの作成実習を実施した。

・標準的なカリキュラム案に基づいた「地域住民のための生活日本語教室」運営

9月より、豊田市在住・在勤の外国人だけではなく日本人も対象とした日本語教室をテーマ、地域に応じて6教室開設した。教室内で地域住民として必要な基礎知識について対話することにより、外国人は地域住民として必要な基礎知識と生活日本語を習得し、日本人は相互理解のためのやさしい日本語を習得することを目的とした。

・標準的なカリキュラム案に基づいた「地域住民のための生活日本語教室」教材作成

生活上の行為を単位として立案し、「イメージをつかむ」「体験・行動する」という実践体験と「学習目標を設定し学習する」「学習結果を伝える」という教室活動を1セットにした教材を作成した。

事業評価を行うために、研修会及び教室運営をモニタリングする目的で、第二回～第四回運営委員会を開催した。

4. 運営委員会の開催について

【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題	検討内容
1	平成25年 5月31日 17:00～ 20:00	3時間	名古屋大学 CALEフォーラム	品田潤子 新矢麻紀子 金田智子 米勢治子 古橋三吉 勝野二徹 村上京子 北村祐人 衣川隆生	①「地域住民としてのライフステージを支える生活日本語教室運営事業」について ②「とよた日本語学習支援システムの運営及び導入教育カリキュラム等の追加委託」との相互協力関係について ③事業参加希望者を交えての意見交換会	・業務計画書・事業計画に基づき、平成25年度の事業目的、教材作成者・指導者育成研修会、教材作成、教室運営の基本方針と流れの説明が行われ、その内容について意見交換が行われた。 ・事業主体が委託を受けている「とよた日本語学習支援システムの運営及び導入教育カリキュラム等の追加委託」の概要説明と文化庁事業の相互見解について説明が行われた。 ・事業に参加を希望している参加16名を交えた質疑応答、意見交換会が行われた。
2	平成25年 8月10日 11:00～ 13:00	2時間	名古屋大学留 学生センター 201	新矢麻紀子 金田智子 勝野二徹 村上京子 北村祐人 衣川隆生	①教材作成者・指導者育成研修会経過報告 ②教材作成者・指導者育成研修会今後の予定 ③研修会の課題と評価について意見交換 委員会終了後、委員による研修会モニタリング	・教材作成者・指導者育成研修会の基本方針と流れ、当日までに実施された3回の研修会の内容について説明が行われ、その内容について意見交換が行われた。 ・4回以降の研修会の内容について説明が行われ、意見交換が行われた。 ・今回の事業の目的、内容、手法、及び研修会の目的、内容、手法と「生活者としての外国人」のための日本語教育事業の整合性について意見交換が行われ、その話し合いにもとづいて、中間段階の課題と評価の取りまとめを8月31日までに進めようことを委員に依頼した。

3	平成25年 12月14日 13:00~ 16:00	3時間	外根集会場	品田潤子 勝野二徹 衣川隆生	①「地域住民のための生活日本語教室」の概要説明 ②「地域住民のための生活日本語教室」教室活動モニタリング ③協働先(自治区長)との意見交換 ④教室運営の課題と評価についての意見交換	・「地域住民のための生活日本語教室」開設地域の状況説明、教室の目的、当日までの教室活動・内容についての説明が行われ、それについての意見交換が行われた。 ・事業評価に向けた教室活動のモニタリングが行われた。 ・概要説明、モニタリングの結果にもとづき、教室運営の課題と評価についての意見交換が行われた。
4	平成26年 2月13日 15:00~ 18:00	3時間	豊田市国際交流協会 グローバルスクエア	新矢麻紀子 米勢治子 北村祐人 衣川隆生	①「体験・交流型日本語教室」の概要説明 ②「体験・交流型日本語教室」教室活動モニタリング ③事業全体の課題と評価についての意見交換	・「体験・交流型日本語教室」開設地域の状況説明、教室の目的、当日までの教室活動・内容についての説明が行われ、それについての意見交換が行われた。 ・事業評価に向けた教室活動のモニタリングが行われた。 ・概要説明、モニタリングの結果にもとづき、事業全体の課題と評価についての意見交換が行われた。

5. 日本語教室の実施

(1) 講座名称 日本語講座「災害時の対応について学ぼう」

(2) 目的・目標 本講座の目的・目標は、講座受講や体験活動、その後の外国人住民と日本語住民との対話を通して、①地域在住の外国人がそのコミュニティで円滑な日常生活を営むために必要となる防災などの基礎知識を身に付けること、②それらのテーマに関わる生活日本語を運用する能力を身につけること、③外国人住民と接する機会がある日本人住民が相互理解のためのやさしい日本語を身につけることにある。

(3) 対象者 地域在住、在勤の外国人住民

(4) 開催時間数(回数) 6時間 (全 2回)

(5) 使用した教材・リソース 豊田市防災対策課との協働のもと作成したパワーポイント教材

(6) 受講者の総数 27人

(出身・国籍別内訳 中国15名、台湾3名、タイ2名、インド1名、インドネシア5名、トルコ1名)

(7) 日本語教室の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	授業概要	講師又は指導者名	補助者名
1	平成25年 9月5日 9:00~ 16:00	6時間	豊田市防災学習センター あすて	27人		防災	①豊田市防災学習センターで災害時の対応を体験 ②豊田市防災対策課の職員による防災ワークショップを聞く ③以上2点の体験・行動活動を踏まえ、防災に関わる日本語をボランティアと共にふりかえる	兼子博樹(あすて) 那須聖加(豊田市防災対策課) 北村祐人	
2	平成25年 9月6日 9:00~ 16:00	6時間	あすて	27人		防災	①防災食を手に取り、作り方をボランティアと共に読み解く ②実際に防災食をつくってみる ③避難訓練体験 ④以上2点の体験・行動活動を踏まえ、防災に関わる日本語をボランティアと共にふりかえる ⑤身近なものでできる防災グッズ作成 ⑤日本語ボランティアと対話活動 ⑥2日間の学びを日本語ボランティアとともにふりかえる	兼子博樹(あすて) 増田和信(豊田市災害コーディネーター) 北村祐人	

(8) 受講者の募集方法

協働先である公益財団法人あすてが募集を行った。

(9) 特徴的な授業風景(2～3回分)

1) 取組テーマ「災害と防災に関わる日本語を学ぼう」平成25年9月5日

本事業の目的は、行動・体験の中から日本語及び生活知識を習得していくことである。そのため本教室においても行動・体験をまず行ってから、知識導入と日本語学習につなぐこととした。特にこの回では、

①災害時体験(豊田市防災学習センター)

②災害ワークショップ(豊田市防災対策課)参加

の二つの行動・体験からの日本語及び生活知識の学習をねらいとした。

豊田市防災学習センターでは、災害の体験だけではなく職員の説明を聞く機会もあり、後半の防災ワークショップを支えることになった。また、職員の話した日本語をメモし、後半の防災ワークショップに備えた。また、本事業には学習の補助を行うため多数の日本語パートナー(ボランティア)が参加した。これらのボランティアが学習者とグループを組み、学習者の日本語学習をサポートした。

今回の目的は、災害や防災に関わる日本語を学び、その背景となるべき知識をも身につけることである。また、関連機関に依頼し、担当者からのリアリティのある説明を聞くことができた。また、それをワークショップや体験的な内容とすること、日本語パートナー(ボランティア)コミュニケーション活動を行いながら実施することにより、双方向的なコミュニケーション能力を養うことができた。

2) 取組テーマ「災害時の対応に関わる日本語を学ぼう」平成25年9月6日

今回は避難訓練や防災グッズを実際につくる中で日本語を学んだ。講師には協働先である公益財団法人あすてと豊田市災害ボランティアコーディネーターの増田和信氏に実演をお願いした。この回の流れとしては、

①避難訓練

②防災食試食

③防災グッズ作成

これら体験の後、日本語パートナー(ボランティア)とのふりかえりの中で、覚えておくべき日本語をピックアップしたり、防災食の作り方を讀んだりした。これらのふりかえり活動は、防災に関わる日本語の習得だけではなく、コミュニケーション上の表現習得にも役立った。

(10) 目標の達成状況・成果

本講座では、終了後に学習者を対象としたアンケートを実施した。防災に関わる日本語の習得や防災知識の理解度、またそれを生かした行動へ結び付けられそうかの観点から5段階で評価項目を設定した。アンケートの結果は、平均4.2点とおおむね高い結果を得ることができた。また、自由記述の項目では、自国との防災対策の比較を行って自国の家族や仲間に伝えたいという意見や、自身の職場や家庭でどのように対策を行うかといった大変具体的な行動目標を設定する意見も書かれていた。また、日本語パートナー(ボランティア)とのコミュニケーションを重視したプログラムについても、日本語の表現等のフォローを綿密に行われた点や生の日本語に触れることができた点について高評価を得られた。

また、実施にあたり多くの協働者と運営にあたったことは、多方面からの視点をとりこむことにつながった。特に、施設の管理者・災害ボランティアコーディネーター・日本語教育専門家の視点は、防災啓発及び日本語教育プログラムとして、内容の充実と教育効果の高い内容にすることにつながった。一方で、学習者募集や内容の詰めについて、ある程度協働者にまかせることは、最小限の労力でのプログラム運営をもたらした。また、本学だけでは呼び込めない層の学習者・ボランティアにも教室を知ってもらうことができた。

また、本プログラムは学習者だけではなく、協働者である施設にもよい効果を与えた。施設として外国人向けの災害対策を再考するきっかけとなり、現在改善に向け取り組んでいるようである。

(11) 改善点について

こちらであらかじめプログラムを設定したため、学習者ニーズを十分にプログラムに反映できたか疑問である。アンケートにもあまり改善点等は見られず、他者からの反応を十分に聞き取りできていない状況である。協働者間の満足度や学習者のまわりの人たちの反応もかなりよいプログラムであったが、それに満足せず今後は厳しい意見も吸い上げることができるようなアンケートや聞き取りができるようにしたい。



防災ワークショップの様子



避難訓練体験の様子

(1) 講座名称 地域住民のための生活日本語教室

(2) 目的・目標 本講座の目的・目標は、講座受講や体験活動、その後の外国人住民と日本語住民との対話を通して、①地域在住の外国人がそのコミュニティで円滑な日常生活を営むために必要となるごみ、防災などの基礎知識を身に付けること、②それらのテーマに関わる生活日本語を運用する能力を身につけること、③外国人住民と接する機会がある日本人住民が相互理解のためのやさしい日本語を身につけること、④これらの機会を通して、外国人住民が地域コミュニティの担い手となることを促し、少子高齢化に向かう地域コミュニティの維持・向上を図ることにある。

(3) 対象者 地域在住・在勤の外国人

(4) 開催時間数(回数) 2時間 (全 7回)

(5) 使用した教材・リソース 市役所等の公共機関作成の配布資料及び作成教材

(6) 受講者の総数 15人

(出身・国籍別内訳 ペルー 6名、ブラジル 3名、中国 3名、インドネシア 1名、ベトナム 1名、韓国 1名)

(7) 日本語教室の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	授業概要	講師又は指導者名	補助者名
1	平成25年 11月30日 13:30～ 15:30	2時間	外根集会場	9人	ペルー(4名) ブラジル (3名) 中国(1名) 韓国(1名)	ごみについて 考えよう	ごみ分別ゲーム、豊田市の出前講座「ごみについて考えよう」の受講を通して、ごみ問題についての基礎知識を身に付ける。さらに自治会のごみ捨てに関する取組も聞き、自分たちに何ができるかを考える。	得永 美穂	岩本道子 日置陽子 中村諭実子
2	平成25年 12月7日 13:30～ 15:30	2時間	外根集会場	4人	ペルー(3名) ブラジル (1名)	エコファミリー カードを作ろう	豊田市エコファミリーカードについての説明を理解した上で、実際にエコファミリーカードの申請を日本語を使って行う。その場面を録画し、終了後、日本語パートナーと録画したやりとりを視聴し振り返り、より良いやりとりの方法を検討する。	得永 美穂	岩本道子
3	平成25年 12月14日 13:30～ 15:30	2時間	外根集会場	5人	ペルー(2名) ブラジル (1名) 中国(2名)	リサイクルス テーションへ 行こう	全員がゴミを持参し住宅に隣接したリサイクルステーションで体験学習を行う。ゴミの捨て方の説明を聞き理解した上で、エコファミリーカードを使ってゴミを捨て、理解の適切さを確認する。	得永 美穂	岩本道子
4	平成25年 12月21日 13:30～ 15:30	2時間	外根集会場	6人	ペルー(3名) ブラジル (1名) 中国(1名) インドネシ ア(1名)	ごみについて 話しあおう	1～3回で記入したワークシートを参照しながら学んだことを新規参加者に向けて発表する。もう一度、ごみ問題や環境問題について自分たちが地域社会で何ができるかを参加者全員で検討する。	得永 美穂	中村 諭実子 苅谷 太佳子
5	平成26年 2月1日 13:30～ 15:30	2時間	外根集会場	5人	ペルー(3名) ブラジル (1名) ベトナム (1名)	防災1	防災講座1を通して、地震災害についての基礎知識を身に付けるとともに、住宅内でどこに避難すればいいか、避難所はどこか、家族とどのように連絡を取るかなど、地震が起こった時の対応方法について、日本語パートナーとかがえる。	得永 美穂	村上京子 岩本道子
6	平成26年 2月8日 13:30～ 15:30	2時間	外根集会場	4人	ペルー(2名) ブラジル (1名) インドネシ ア(1名)	防災2	防災講座2を通して、どのような地震対策をとればいいのか、地震時にどう対応すればいいのかの知識を身に付ける。また身元確認カードに記入することで、個人情報の読み書き能力を確認するとともに、その重要性に気づく。	得永 美穂	古賀恵美
7	平成26年 2月15日 13:30～ 15:30	2時間	外根集会場	5人	ペルー(4名) ブラジル (1名)	防災3	防災講座3を通して、非常持ち出し品や備蓄品についての知識を身に付け、その知識にもとづいて、自分は何を準備すればいいのかのリストを作成する。また、非常食、携帯食の説明にもとづいて、震災後3日間のメニューを考える。	得永 美穂	中村諭実子

(8) 受講者の募集方法

自治会の全面協力のもと、住宅内の外国人世帯には日本語教室のチラシを全戸配布、日本語パートナー募集に際しては、掲示板掲示と回覧により募集を行った。さらに「青空集会」や「定例会」と行った自治区の集まりの場で直接参加の呼びかけを行ってもらった。

(9) 特徴的な授業風景(2~3回分)

1) 取組テーマ「ごみについて考えよう」平成25年11月30日

豊田市eco-Tインタープリター、豊田市環境部ごみ減量推進課、自治区との協働のもと、ごみ問題についての基礎知識とその問題に関する日本語を身につけることを目的とした教室活動を行った。まず、豊田市eco-Tインタープリターの支援のもと、ごみ分別ゲームを行った。そこで、ごみの分け方についての基礎知識とそれに関わる用語を日本語学習支援ボランティア(以下、日本語パートナー)との対話を通して学習した。次に、豊田市環境部ごみ減量推進課による出前講座「ごみについて考えよう」を聞き、市内のごみの状況、ごみ分別の必要性などを理解した。最後に、自治区ではどのようにごみの課題に取り組んでいるかを自治会から説明してもらい、地域住民として、今後自分たちに何ができるかを考え、発表した。

2) 取組テーマ「エコファミリーカード」平成25年12月7日

豊田市環境部環境政策課との協働のもと、エコファミリーカードについての基礎知識を身につけるとともに、カードの申請に必要なやりとりを身につけることを目的とした教室活動を行った。まず、環境政策課の職員から豊田市が発行しているエコファミリーカードの目的や利用方法についての説明を聞き、日本語パートナーの支援を受けながら、その内容を理解した。次に、教室内に仮設された出張窓口で実際にエコファミリーカードの申請を日本語を使って行い、その状況をタブレットPCを利用して録画した。申請終了後、学習者と日本語パートナーがグループになり、申請時のやりとりを見直し、振り返ることで、より良いやりとりの方法を検討し、学習した。

3) 取組テーマ「地震に備えよう」平成26年2月14日

豊田市社会福祉協議会との協働のもと、非常持ち出し品や備蓄品の準備など地震に備えた対策についての知識を身につける活動を行った。まず、豊田市社会福祉協議会の講座担当者による非常持ち出し品や備蓄品などについての説明を聞き、その説明にもとづいて日本語パートナーと話し合いながら何を準備するかのリストを作成した。完成したリストに対しては講座担当者からコメントをもらった。次に、非常食、携帯食についての実物、実演を通じた説明を聞き、震災後3日間の献立を日本語パートナーと一緒に検討、各家庭ごとの具体的な備蓄食品のリストを作成した。最後に、非常食の試食も行った。

(10) 目標の達成状況・成果

本講座の最大の目標は④で記載した「ある地域に在住する外国人住民と日本人住民が教室に集い、ごみ、防災などの身近なテーマについて語り合い、その活動を通して地域コミュニティの維持・向上を図ること」にあった。この目標に関しては大きな成果が得られた。第一に、教室の開設準備、学習者募集、運営に際して、自治区長をはじめとする自治区の全面的な協力が得られたことがあげられる。特に、学習者募集に際しては、自治会の全面協力を得ることができ、その結果、学習者も日本語パートナーもほぼ同じ住宅に住んでいる人で活動を行うことができた。これは本実践の最大の成果である。また、地域住民が参加することで、実態に則した具体的なごみの捨て方や防災を検討し、その過程を通して知識と運用能力を身につけることもできた。この点からも、①、②の目標は達成できたと考えられる。講座や体験活動の実施に際しては、市職員やボランティアグループの協力が得られた。講座の担当者からは、外国人の視点から行政サービスや情報の発信の仕方を検討する機会になり、今後のサービスのあり方に非常に示唆を得られたというコメントを数多く示してもらった。これは、今回の講座だけでは達成できなかったが、③で掲げた相互理解のためのやさしい日本語を身につける機会を提供したのものであると考えられる。

(11) 改善点について

上述したとおり、本講座は地域コミュニティの維持・向上には貢献したと考えられる。しかしながら、参加者数は住宅内の住民総数から考えるとまだまだ非常に少ない。これは、日本語教室だけではなく、地域コミュニティ全体の傾向であるとも考えられる。今後も継続的に活動を行い、日本語教室を子ども会や自治区の活動と同様の地に根ざしたものとしていく必要がある。

また、外国人住民が生活日本語の運用能力を身につけ、日本人住民が相互理解のためのやさしい日本語を身につけるという目標の②、③に関しては、その機会を提供することはできたが、その達成度はまだ十分とは言いがたい。この点に関しては、外国人住民だけではなく、講座や体験活動の担当者、そして、日本語パートナーも、自分自身の言語行動をモニタリングし、それを振り返る機会を作ることで、徐々に改善されていくものであると考えられる。したがって、今後はふりかえりとフィードバックの方法、時間確保についても改善していく必要がある。



エコファミリーカードの説明



防災2の教室風景

(1) 講座名称 体験・交流型日本語教室「図書館へ行こう-図書カードを申請して、本を借りて読んで、紹介してみよう-」

(2) 目的・目標 本講座の目的・目標は、図書館講座や体験活動、外国人住民と日本語住民との対話を通して、①図書館が市民に対して提供しているサービスを外国人住民が知ることで、本の楽しさ、識字の大切さやメリットに気づき、より豊かな市民生活が送れるようになること、②図書館のサービスを利用するために必要な日本語を運用する能力を身につけること、③外国人住民と接する機会がある公的機関の職員が外国人にとっても理解しやすいやさしい日本語について考えるきっかけを作ること、④これらの機会を通して、日本人住民や公的機関の職員が外国人住民にも利用しやすい公的サービスのあり方を考えるきっかけを作ることにある。

(3) 対象者 地域在住・在勤の外国人

(4) 開催時間数(回数) 2時間 (全 3回)

(5) 使用した教材・リソース 作成教材

(6) 受講者の総数 8人

(出身・国籍別内訳 ブラジル1名、中国3名、フィリピン2名、フランス1名、インドネシア1名)

(7) 日本語教室の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	授業概要	講師又は指導者名	補助者名
1	平成25年 12月3日 10:00~ 12:00	2時間	豊田市国際交流協会 とよたグローバルスクエア	8人	中国(3名) フィリピン(2名) ブラジル(1名) フランス(1名) インドネシ	図書館の施設やサービスを知ろう	多言語で絵本の読み聞かせ、図書館員による図書館の施設やサービスなどの紹介を通して、本の楽しさに気づくとともに図書館についての基礎知識を得る。その上で、翌週の体験学習に向け、行動目標を設定する。	萩原 栄子	小野則子 米勢治子
2	平成25年 12月10日 10:00~ 12:00	2時間	豊田中央図書館	5人	中国(2名) フィリピン(1名) ブラジル(1名) フランス(1名)	図書館へ行こう	図書館で図書カードの申請や図書の借出しなどの体験活動を日本語を使って行う。その場面は録画、録音する。	萩原 栄子	小野則子 米勢治子 笹山悦子
3	平成25年 12月17日 10:00~ 12:00	2時間	豊田市国際交流協会 とよたグローバルスクエア	3人	フィリピン(1名) ブラジル(1名) インドネシア(1名)	図書館の体験を振り返ろう	図書館での体験活動を映像資料にもとづいてふりかえり、図書館を利用する際に必要な日本語を認識し学習する。さらに、図書館の良い所、改善点などを日本語パートナーと検討し、提言につなげる。	萩原 栄子	小野則子 米勢治子

(8) 受講者の募集方法

市内のコミュニティセンター、交流館図書館、公的機関などにあるチラシ棚への学習者募集チラシ設置、facebookの活用、輸入食料品店の掲示板へのポスター掲示

(9) 特徴的な授業風景(2~3回分)

1) 取組テーマ「図書館の施設やサービスを知ろう」平成25年12月3日

多言語で絵本の読み聞かせや図書館紹介を通して、図書館や本の楽しさなどに気づき、その上で図書館での体験活動を行う際の行動目標を検討した。まず、アイスブレイキングを兼ねて、多言語で絵本の読み聞かせグループによる読み聞かせを体験し、その後、外国人住民(以下、受講者)と日本語学習支援ボランティア(以下、日本語パートナー)が対話を通してことばや内容の理解を深めた。次に、図書館が市民に対して提供しているサービスについての説明を図書館員が行った。最後に、翌週図書館で体験活動をするのを伝え、図書館でどのようなサービスを利用したいか、そのとき、どのような表現が必要かという行動目標と目標達成のために必要な表現を日本語パートナーと検討した。

2) 取組テーマ「図書館へ行こう」平成25年12月10日

豊田市中心図書館との協働のもと、実際の図書館施設やサービスについて理解するとともに、公的サービスを受けるために必要な日本語運用能力を体験活動を通して身につける。まず、受講者と日本語パートナーがペアになり、前週に設定した行動目標とその目標達成のために必要な表現を確認した。その上で行動目標に応じた体験活動を図書館で行った。受講者が職員とやりとりを行う際には、ペアとなった日本語パートナーは、そのやりとりを観察、記録し、施設が外国人にとって利用しやすいものになっているか、職員が使う日本語が外国人にとって理解しやすいものになっているかを検討した。

3) 取組テーマ「体験を振り返ろう」平成25年12月17日

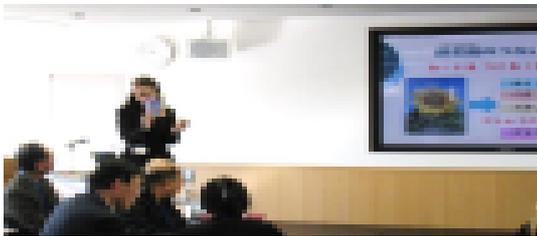
図書館での体験活動を振り返り、図書館が市民に対して提供しているサービスをもう一度確認するとともに、図書館を利用する際に必要な日本語を認識し学習する。まず、図書館で借りた本のタイトル、内容、感想などについて受講者と日本語パートナーが話し合い、それを他の参加者とも共有する時間を設けた。次に、体験学習の映像資料を再生し、行動目標が達成されたかどうかを確認する。その上で、体験を文字化した資料を見ながら、再度、良かったところ、言葉が不足と感じる所などをチェックすることで、より良い表現に気づく機会を設けた。最後に、図書館のよいところや工夫してほしいところを受講者と日本語パートナーが話し合い、それにもとづいて、図書館に対する提言を検討した。

(10) 目標の達成状況・成果

本講座の第一の目標は、図書館が市民に対して提供しているサービスについて講座や体験活動を通じて理解するとともに、本の楽しさなどに気づくことにある。この点については、受講者のアンケート結果に「係員に質問して自分で本を探して借りられるようになった」、「教室に参加する前は漢字が読めない私には使えない場所だと思っていたが、いろんな年齢向けや言語の本を扱っていることがわかり、自分の考えが180度変わった」、「これからは図書館のシステムとサービスを積極的に利用する」などのコメントが寄せられ、十分に達成できたと評価できる。また第二の目標であるサービスを利用するために必要な日本語運用能力を身につけることに関しても「新しい言語を覚える時に『経験』は役に立つと思う。自分の毎日の生活に役に立つ言葉を覚えることができた」と体験活動が有効であったことが示唆される。ただし「日本語を使ってみて、よりスムーズなコミュニケーションができればなあと思うようになった」「たくさんの日本人の友達が欲しいと思うようになりた」など3回の教室活動ではカバーしきれない部分もある。第三、第四の目標に関しては、受講者だけではなく日本語パートナーからも数多くの提案が提示された。この結果から、外国人住民にも利用しやすい公的サービスのあり方を考えるきっかけは作ることができたと考えられる。また、教室で示された提案は、報告書という形でコーディネーターから図書館へもフィードバックされている。今後も継続的に図書館と協働で取組を進めることにより、これらの提言も公的サービスに反映されることを期待する。

(11) 改善点について

本講座では、講座を聞く、体験活動を行う、という実体験を通して行動目標や学習目標を認識し、受講者と日本語パートナーが対話を行いながら、その目標の達成を目指すという方式をとった。上述した目標達成度からも、この方式は、十分な成果を挙げられると考えられる。しかしながら、講座、体験活動を記録する際には、協働先等から了解を得ること、ふりかえりで利用可能な記録を取るための機器の利用、そのサポートなど解決しなければならない点もある。体験活動を映像や音声で効果的にふりかえり、気づきを促すためには、やりとりの文字化資料を利用するなど、その対策を考える必要がある。また、単にそれらの資料を提供するだけでは活動が促進されることも限らない。より現実的で、かつ効果が期待できる方法論を検討する必要がある。さらに、言語習得という観点からは、3回の活動では気づきは促されるかもしれないが、習得までには至らないとも言える。したがって、このような講座を継続的に実施できるような協働体制を整えていく必要もある。



「図書館の施設やサービスを知ろう」講座風景



図書館体験活動風景

(1) 講座名称 日本語講座「救急時の対応について学ぼう」

(2) 目的・目標 本講座の目的・目標は、講座受講や体験活動、その後の外国人住民と日本語住民との対話を通して、①地域在住の外国人がそのコミュニティで円滑な日常生活を営むために必要となる救急時の対応についての基礎知識を身につけること、②それらのテーマに関わる生活日本語を運用する能力を身につけること、③外国人住民と接する機会がある日本人住民が相互理解のためのやさしい日本語を身につけることにある。

- (3) 対象者 地域在住、在勤の外国人住民
 (4) 開催時間数(回数) 3時間 (全 1回)
 (5) 使用した教材・リソース 豊田市消防本部との協働のもと作成したパワーポイント教材
 (6) 受講者の総数 24人
 (出身・国籍別内訳 中国19名、タイ5名)

(7) 日本語教室の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	授業概要	講師又は指導者名	補助者名
1	平成25年 12月22日 13:00~ 16:00	3時間	あすて	24人	中国 19名 タイ5名	救急	①豊田市消防本部指令課職員による救急ワークショップを聞く ②豊田市消防本部指令課職員を相手に通報体験 ③以上2点の体験・行動活動を踏まえ、防災に関わる日本語をボランティアと共にふりかえる	鈴木政治(豊田市消防本部指令課) 小幡昌央(豊田市消防本部指令課) 北村祐人	

(8) 受講者の募集方法

協働先である公益財団法人あすてが募集を行った。

(9) 特徴的な授業風景(2~3回分)

1) 取組テーマ「災害と防災に関わる日本語を学ぼう」平成25年9月5日

本講座では、豊田市消防本部と協働し、プログラムを組み立てた。内容は以下のとおりである。

- ①防災ワークショップ(豊田市消防本部指令課)
- ②119番通報体験(あすて兼子・豊田市消防本部指令課)
- ③ふりかえり(あすて兼子)
- ④通報の表現など確認(愛知淑徳大学)

主な内容としては、緊急時の対応についてのワークショップを聞いた。その後、実際に豊田市消防本部の職員を相手に、学習者が119番通報する模擬通報体験を行った。その様子をiPadで撮影し、グループの中でどのような表現が出てきたか、どういった表現や言い方をしたらよりよいかを日本語パートナー(ボランティア)とふりかえた。その後、通報に関する表現を示すことで、行動・体験を日本語表現等の知識に結び付けることができた。

(10) 目標の達成状況・成果

本講座では、外国人対象のアンケートで必要な知識として挙げられることが多い「救急」について取り扱った。そのため、多くの学習者や関係者にとって満足度の高いプログラムとなった。また、プログラムを進めていく上では、愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーションセンターと協働し、本学だけでなく他大学の学生にも関わってもらうことができ活気のある教室となった。

また、他大学との連携によりネットワークがより強固なものとなっただけでなく、そこに他の団体にも関与してもらうことで関係機関としての結びつきを作ることができた。また、消防本部の外国人に対する取り組みへの関心を高めることもできたようで、今後の協働についても積極的な関わりをしてくれそうである。

(11) 改善点について

今回、協働者間の情報共有・周知に手間取った。稀有なケースではあるが、消防本部担当者の出勤シフト等に合わせることが難しく、連絡や内容の検討に時間がかかってしまった。また、消防本部や他大学が今後の取組について高い関心を示してくれているため、その期待に応えられるような機能を果たしていきたい。



ワークショップ風景



通報体験風景

(1) 講座名称 体験・交流型日本語教室「豊田の野菜を食べよう」

(2) 目的・目標 本講座の目的・目標は、講座受講、体験活動、調理デモの見学、外国人住民と日本語住民との対話を通して、①外国人住民が市の基幹産業の一つである農業についての知識を深め、より豊かな市民生活が送れるようになること、②産直広場で交流をしながら買い物することで、農産品やその調理法について聞いたり理解するために必要な日本語を運用する能力を身につけること、③外国人住民と接する機会がある日本人住民が外国人にとっても理解しやすいやさしい日本語について考えるきっかけを作ること、④日本人住民が外人住民の背景となる食物に関する文化や習慣を知るきっかけを作ることにある。さらに、講座を通して、外国人が日本語教室以外で気軽にコミュニケーションを取れ、地域住民と顔の見える交流が継続的にできる場所づくりに貢献する。

(3) 対象者 地域在住・在勤の外国人

(4) 開催時間数(回数) 2時間 (全 5回)

(5) 使用した教材・リソース 作成教材

(6) 受講者の総数 16人

(出身・国籍別内訳 中国6名、ブラジル4名、タイ3名、インドネシア1名、フランス1名、フィリピン1名)

(7) 日本語教室の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	授業概要	講師又は指導者名	補助者名
1	平成26年 1月16日 15:10~ 17:10	2時間	豊田市国際交流協会 とよたグローバルスクエア	11人	中国(5名) フィリピン(1名) ブラジル(4名) フランス(1名)	豊田の農作物を知ろう	豊田市の出前講座「豊田の農産物」の受講を通して、豊田の農作物、産地、直売所などについての知る。その上で、翌週の直売所での体験学習に向け、行動目標を設定する。	小野則子	古賀恵美
2	平成26年 1月23日 15:10~ 17:10	2時間	豊田市国際交流協会 JAあいち豊田産直プラザ	11人	中国(5名) ブラジル(4名) インドネシア(1名) タイ(1名)	直売所に行こう	直売所(産直プラザ)で日本語を使って交流を行いながら買い物を行う。その場面は録画、録音する。	古賀恵美	小野則子 日下部玲子
3	平成26年 1月30日 15:10~ 17:10	2時間	豊田市国際交流協会 とよたグローバルスクエア	9人	中国(2名) ブラジル(4名) フランス(1名) タイ(2名)	体験活動をふりかえろう	直売所(産直プラザ)での体験活動を映像・音声資料を使ってふりかえり、交流の内容、より良い質問の仕方、わからない時の対応方法について日本語パートナーと検討しその結果について発表する。さらに鍋について話し合い、翌週の教室活動への動機づけを行う。	古賀恵美	小野則子 日下部玲子
4	平成26年 2月6日 15:10~ 17:10	2時間	とよた男女共同参画センター 「キラッ☆とよた」調理室	8人	中国(2名) ブラジル(3名) フランス(1名) タイ(2名)	調理デモを見てレシピを考えよう	調理デモを見学し、調理方法の説明やレシピで使われる表現を理解し学習する。さらにオリジナル鍋のレシピについて考える。	日下部玲子	米勢治子 古賀恵美
5	平成26年 2月13日 15:10~ 17:10	2時間	豊田市国際交流協会 とよたグローバルスクエア	6人	ブラジル(4名) タイ(2名)	オリジナルレシピを紹介しよう	オリジナルレシピを作成し、それをポスターセッション形式で相互に披露しよう。	小野則子	古賀恵美

(8) 受講者の募集方法

以前の講座の受講者やその知り合いへの声かけ。市内のコミュニティセンター、交流館、公的機関などにあるチラシ棚への学習者募集チラシ設置。facebookの活用、輸入食料品店の掲示板へのポスター掲示。

(9) 特徴的な授業風景(2~3回分)

1) 取組テーマ「豊田の農作物を知ろう」平成26年1月16日

豊田市産業部農政課との協働のもと、豊田の農作物についての基礎知識とそれに関係する日本語を身につけることを目的とした教室活動を行った。まず、アイスブレイキングを兼ねて、外国人住民(以下、受講者)と日本語学習支援ボランティア(以下、日本語パートナー)がグループになり自己紹介を行った。次に、豊田市産業部農政課担当者による出前講座「豊田の農産物」を聞きながら、食べたい農作物は何か、産地はどこか、どこで買えるかなどについて、受講者と日本語パートナーが対話を行った。最後に、最後に、翌週産直広場で体験活動をする事を伝え、何を書きたいか、どんな質問をしたいかという行動目標と目標達成のために必要な表現を日本語パートナーと検討した。

2) 取組テーマ「直売所へ行こう」平成26年1月23日

JAあいち豊田の直売所(産直プラザ)との協働のもと、産直プラザの様子や農作物についての知識を深めるとともに、その場面で情報を得たり買い物したりする際に必要な日本語運用能力を体験活動を通して身につける。まず、受講者と日本語パートナーがペアになり、前週に設定した行動目標とその目標達成のために必要な表現を確認した。その上で行動目標に応じた体験活動を産直プラザで行った。受講者が店員と食材やその調理法についてがやりとりを行う際には、日本語パートナーは、どのような交流が行われているかを観察し記録した。活動後には、産直プラザの様子やむずかしかった点などのふりかえりを行った。

3) 取組テーマ「調理デモを見てレシピを考えよう」平成26年2月6日

JAあいち豊田指導部との協働のもと、豊田特産の農作物を使った料理に関わる知識を深めるとともに、その調理やレシピで利用する日本語表現を身につける活動を行った。調理デモに際しては、JAあいち豊田指導部による調理の実演と説明を補足する形で、指導補助者が受講者にとってもわかりやすいやさしい日本語を使いながら、同様のデモを行い、受講者は日本語パートナーと一緒にそれを見学した。調理と試食後、受講者と日本語パートナーが感想を述べ合い、レシピや調理で利用される日本語の学習した。さらに、調理デモを参考にどのような鍋を作りたいかについてもグループで検討し、メモを作成した。

(10) 目標の達成状況・成果

本講座の第一の目標は、外国人住民が市の基幹産業の一つである農業についての知識を深め、より豊かな市民生活が送れるようになることにある。この点については、受講者、日本語パートナーのアンケート結果に「買い物することで新しい野菜の名前や見たことがない野菜を実際に知ることができた」、「見たことはあるけれど使い方はわからないゴボウやレンコンのことなどずっと学習者が疑問に思っていたことを聞いてもらえ有用と感じた」という声が多数あるように、十分に達成できたと評価できる。また第二、第三の目標である農産品やその調理法について聞いたり理解するために必要な日本語を運用する能力を身につけること、日本人住民が外国人にとっても理解しやすいやさしい日本語について考えるきっかけを作ることについても、「野菜の日本語名もわかってきて、料理に関する単語もさらに知るようになった」等の声も多数ありあり、成果を実感できるものであった。ただし、「煮る、焼く、あげる」などの動詞や「ぐつぐつ、コトコト」などのオノマトベなど難しい表現が多いので言葉のリストを作って練習したかったというコメントも出されているため、その点は改善点として検討する必要がある。第四の目標についても食物という文化や習慣に根ざしたテーマを取り上げたため、その調理方法の違いなどが話題となり、十分な成果を示すことができたと考える。

(11) 改善点について

本講座では、「図書館へ行こう」と同様、講座を聞く、体験活動を行う、という実体験を通して行動目標や学習目標を認識し、受講者と日本語パートナーが対話を行いながら、その目標の達成を目指すという方式をとった。したがって、成果と改善点については「図書館へ行こう」と同様の点が挙げられる。さらに、上記目標の達成度で指摘したように、生活に密着した言語活動であるため、感覚的な表現やオノマトベが多用されることもある。それらの学習支援の方法も検討する必要があると考える。



産直プラザでの体験活動風景



調理デモ風景

(1) 講座名称 暮らしに役立つ日本語教室

(2) 目的・目標 本講座の目的・目標は、外国人住民のための導入教育用ビデオを視聴し、その内容について外国人住民と日本語住民が協働で理解を進めることにより、①豊田市内に在住、在勤の外国人が地域住民として暮らしていくために必要となる救急、防災、医療などの基礎知識を身につけること、②それらのテーマに関わる生活日本語を運用する能力を身につけること、③外国人住民と接する機会がある日本人住民が相互理解のためのやさしい日本語を身につけること、④これらの機会を通して、日本人住民だけではなく外国人住民にとっても住みやすい地域社会のあり方を考えるきっかけを作ることにある。

- (3) 対象者 地域在住・在勤の外国人住民
 (4) 開催時間数(回数) 3時間 (全 6回)
 (5) 使用した教材・リソース 外国人市民のための導入教育ビデオ及び作成教材
 (6) 受講者の総数 15人
 (出身・国籍別内訳 インドネシア 12名、ベトナム3名)

(7) 日本語教室の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	授業概要	講師又は指導者名	補助者名
1	平成26年 3月2日 9:00~1 2:00	3時間	豊南交流館	9人	インドネシア(9人)	119番通報	豊田市作成「外国人市民のための導入教育用ビデオ『119番通報』」を視聴し、日本の救急についての基礎知識を身に付け、応用として、119番通報の模擬体験を行う。	衣川 隆生	
2	平成26年 3月2日 14:30~ 17:30	3時間	井郷交流館	0人	(0人)	119番通報	豊田市作成「外国人市民のための導入教育用ビデオ『119番通報』」を視聴し、日本の救急についての基礎知識を身に付け、応用として、119番通報の模擬体験を行う。	衣川 隆生	
3	平成26年 3月9日 9:00~1 2:00	3時間	豊南交流館	8人	インドネシア(8人)	防災	豊田市作成「外国人市民のための導入教育用ビデオ『防災【知識編】』」を視聴し、生活実態に則した防災知識を身に付けるとともに、地域住民と具体的な対策について話し合う。	衣川 隆生	
4	平成26年 3月9日 14:30~ 17:30	3時間	井郷交流館	3人	ベトナム(3人)	防災	豊田市作成「外国人市民のための導入教育用ビデオ『防災【知識編】』」を視聴し、生活実態に則した防災知識を身に付けるとともに、地域住民と具体的な対策について話し合う。	衣川 隆生	
5	平成26年 3月16日 9:00~1 2:00	3時間	豊南交流館	8人	インドネシア(8人)	医療	豊田市作成「外国人市民のための導入教育用ビデオ『豊田地域医療センターへ行こう』」を視聴しながら、病院内の掲示物で使用されている漢字表記を学習し、病院での外科、内科の受付、診療、会計、薬局における模擬体験活動を行う。	衣川 隆生	
6	平成26年 3月16日 14:30~ 17:30	3時間	井郷交流館	0人	(0人)	医療	豊田市作成「外国人市民のための導入教育用ビデオ『豊田地域医療センターへ行こう』」を視聴しながら、病院内の掲示物で使用されている漢字表記を学習し、病院での外科、内科の受付、診療、会計、薬局における模擬体験活動を行う。	衣川 隆生	

(8) 受講者の募集方法

市内のコミュニティセンター、公的機関などにあるチラシ棚への学習者募集チラシ設置、近隣企業への声かけ。

(9) 特徴的な授業風景(2~3回分)

1) 取組テーマ「119番通報」平成26年3月2日

119番通報の回は外国人受講者及び日本語ボランティア(以下、日本語パートナー)が初めて顔を合わせる機会なので、お互いを知る目的で、参加申込書の氏名、住所、国籍、日本語学習歴などの項目を題材に自己紹介を行った。

この講座で扱うテーマは、119番通報、防災、医療であり、これらのテーマで学習する際には、姓名、住所、電話番号などの個人情報を正確に口頭と筆記で伝えられるようにならないといけない。そこで、教室内では個人情報を扱うことに同意を得た上で、在留カードなどを見ながら申込書に記入しながら、それらを日本語で正確に伝えられるように練習を行った。

外国人市民のための導入教育用ビデオ「119番通報」(豊田市作成)を見ながら、「救急に関わるキーワード」、「119番通報って?」、「119番通報の仕方」などの小テーマに区切り、日本語パートナーと対話しながら、その内容の理解を行った。次に、理解した内容をやさしい日本語で伝えるにはどうすればいいかをグループで考え、練習を行いミニ発表も行った。最後に、ビデオ教材を見ながら、病気、火事、怪我を想定した119番通報を模擬体験した。

2) 取組テーマ「防災【知識編】」平成26年3月9日

外国人市民のための導入教育用ビデオ「防災【知識編】」(豊田市作成)を見ながら、「災害の種類」、「地震が起こったらどうなるの?」「震度って?」「地震が起こったら?」「地震に備えて何をしておく?」などの小テーマに区切り、その内容の理解を行った。次に、理解した内容をやさしい日本語で伝えるにはどうすればいいかをグループで考え、練習を行いミニ発表も行った。最後に、豊田市のハザードマップを見ながら予想震度の確認、避難所と経路の確認、非常持出袋、備蓄品として何を準備しておくか、住居ではどんな対策が必要かなど、地域に密着した内容を日本語パートナーと話しながら検討した。

3) 取組テーマ「医療」平成26年3月16日

このテーマでは、豊田市内で夜間、休日の救急対応をしている「豊田地域医療センター」で診療を受けられるようになることを目標としている。まず、医療センター内に漢字で掲示されている案内板の複数の写真から「外来」「受付」「薬局」「案内」などの探し、それが何をするとところかについて、日本語パートナーと話しながら理解した。その上で、外国人市民のための導入教育用ビデオ「豊田地域医療センターへ行こう」(豊田市作成)を見ながら、初めて診療に訪れた時にはどこに行けばいいか、わからない時にはどうすればいいかを確認した上で、受付での申込書記入、問診、診療、会計、薬局での会話を体験し練習した。

(10) 目標の達成状況・成果

本講座の目標は、豊田市内に在住、在勤の外国人が地域住民として暮らしていくために必要となる基礎知識を身に付け、その内容が伝えられるようになること、第二に外国人と接する機会がある日本人住民がやさしい日本語を身につけること、さらに学習者と日本人住民が教室内の対話を通して、住みやすい地域社会を構築する基礎を作ること目標としている。

第一の目標は教室における学習者の発表内容とアンケート結果から、第二の目標は日本語パートナーの活動後のふりかえり記録からその達成状況と成果を検証する。まず第一の目標に関しては、自分の国と日本の制度の違いに気づき、それらの違いに注意しながら、地域住民として暮らしていくために必要となる基礎知識を説明できるようになったことが示された。しかしながら、その内容をわかりやすく他の外国人市民にも伝えられるようになったかについては、メモした内容をそのまま読み上げるなど、準備や練習が不十分な点も明らかとなった。第二の目標については、病院における「外来」と「初診」の差、「非常食」と「携帯食」の差を問われたことから、学習者の視点で制度や用語を見直すことにより、誰にとってもわかりやすい表示や説明の仕方の重要性に気づくことができた。

(11) 改善点について

この講座では、地域の在住外国人人口分布などを参考に会場を設定したが、会場の規模の関係から、午前と午後に教室を分散せざるを得なかった。受講対象となる外国人住民には日曜日の午後の教室は都合がいい時間帯ではなかった。そのため、午前に比べて午後は受講者が極端に少なかった。会場だけではなく、時間帯の調整が非常に重要である。

また、テーマ数と時間数のバランスも不適切であった。今回は1日1テーマという形で講座を計画したが、上述したように、理解した内容を受講者が自分なりのことばで伝えられるようになるという目標を達成するためには、1テーマ3時間では不十分であった。講座開設の場所、時間帯と、内容のバランスを今後は調整していく必要がある。

使用機器に関しても、ビデオ教材の視聴ポイントの移動、繰り返し視聴などに困難を感じたというコメントももらった。これらの技術的な点も改善に、誰にとっても使いやすい機器で活動を行わなければならない。



教室風景



教室風景

6. 日本語教育を行う人材の養成・研修の実施

(1) 講座名称 「地域住民のための生活日本語教室」教材作成者・指導者育成研修会

(2) 目的・目標 本研修会の目的、目標は、標準的カリキュラム案の理念と方法を理解した上で、連携先と協働で地域に密着した教室の設置計画、教材開発を含む教室準備、教室運営、教室評価、改良ができるコーディネーターと指導者を育成することにある。モニター学習者を同伴した域内外国人の状況、リソース等の把握、体験・行動を通じた接触場面の言語運用資料の収集、収集資料の分析、具体的な日本語教育プログラムの作成実習と進める。

- (3) 対象者 研修会に8割以上参加可能で、研修後、豊田市内で教材作成者、指導者として活動できるもの
 (4) 開催時間数(回数) 4時間 (全 10 回)
 (5) 使用した教材・リソース「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について
 (6) 受講者の総数 15 人
 (出身・国籍別内訳 日本(15名))

(7) 養成・研修の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	授業概要	講師又は指導者名	補助者名
1	7月13日 13:00- 17:00	4時間	豊田市国際交流協会 グローバルスクエア	14人	日本(14人)	事業概要と進め方	文化庁事業のオリエンテーションとして、循環的な手順を踏みながら研修、事業を進めていくことを説明し教室活動、教材の流れを確認する。その上で、本研修会・本事業の基本指針の説明し、グループで教室活動のテーマとして可能性のあるものを検討する。	衣川 隆生	
2	7月20日 13:00- 17:00	4時間	豊田市国際交流協会 34会議室	11人	日本(11人)	体験活動の検討	課題として考えてきた教室テーマ、内容が地域の外国人住民の生活に必要なものか、文化庁の教室テーマとして運営可能かどうか、協働対象となる組織・団体・人がいるかなどの観点から検討し、テーマ候補を決定する。	衣川 隆生	
3	7月27日/ 7月31日	グループごとに4時間	豊田市国際交流協会 34会議室	13人	日本(13人)	体験活動の実施方法の検討・調整	教室テーマ、内容、協働先候補と依頼内容を決定する。グループ内で役割分担を決定し、打診、調整を行う。	小野 則子 得永 美穂 萩原 栄子 萩谷 太佳子	
4	8月10日 13:00- 17:00	4時間	名古屋大学留学生センター 201研修室	14人	日本(14人)	体験活動の実施方法の検討	グループごとにテーマ、内容、協働先との交渉結果を報告し、具体的な体験学習活動の計画を立案する。	小野 則子 得永 美穂 萩原 栄子 萩谷 太佳子	
5	8月26日/ 8月27日	グループごとに4時間	協働先	15人	日本(15人)	体験活動実施・記録	グループごとに協働先でのモニタリング学習者を交えた体験活動を実施し、映像、音声記録を取る。同時、協働先からのフィードバックを得る。	小野 則子 得永 美穂 萩原 栄子 萩谷 太佳子	
6	8月31日 13:00- 17:00	4時間	豊田市国際交流協会(TIA) 【34会議室】	13人	日本(13人)	教材開発、教室活動の検討	グループごとに体験活動の結果をふりかえりを、その結果にもとづいてどのような教材、教室を行うかを検討する。	小野 則子 得永 美穂 萩原 栄子 萩谷 太佳子	
7~9	8月31日 ~9月14日	12時間	名古屋大学留学生センター	6人	中国(3人)、ブラジル(3人)	教室活動を視野に入れた教材作成作業	グループごとに、教室活動を視野に入れた教材作成作業を実施する。	小野 則子 得永 美穂 萩原 栄子 萩谷 太佳子	
10	9月14日 13:00- 17:00	4時間	名古屋大学留学生センター	12人	日本(12人)	作成教材案と教室活動案の検討	グループごとに試作した教材、教室活動案を発表し、その効果、改善点について検討する。	小野 則子 得永 美穂 萩原 栄子 萩谷 太佳子	

(8) 受講者の募集方法

豊田市内各所にて配布する募集チラシ、「とよた日本語学習支援システム」が運営するホームページにて募集する。

(9) 特徴的な授業風景(2~3回分)

1)「事業概要と進め方」平成25年7月13日

1. 研修会のオリエンテーションと自己紹介を行った。

2. アイスブレイキング

「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案活用のためのガイドブックから鍵概念となる語、文を3つ選び、グループでなぜそれを選んだかの意見を交換した。

3. 事業のオリエンテーション

標準的なカリキュラム案を用い、文化庁事業のオリエンテーションを行い、本事業全体の進め方を説明した。

・循環的な手順を踏みながら研修、事業を進めていくことを説明。

・一般の文化庁事業の教室活動、教材の流れを確認。

・本研修会のゴールがPlan→Doの流れを体験するものであることを確認

・指導力評価項目の目的確認

4. 本研修会・本事業の基本指針の説明

5. 教室活動テーマ候補の確認

6. 協働先候補との交渉経過報告

主として市役所関係の協働先との交渉経過が報告された

7. 次週までの課題

最後に、ひな形とサンプルにもとづき、教室活動案を検討することが課題として示された

2)「体験活動の実施方法の検討・調整」7月27日/7月31日/8月6日

7月20日の研修会において、「消費行動」「医療」の2テーマとそのテーマの担当者が決定した。8月10日の研修会までに、教室テーマ、内容、協働先、依頼内容を決定し、協働先への打診、調整を行った。

「消費行動」グループ

7月27日にグループ活動を行い、豊田市の商業観光課が所管している「外国人おもてなし！ウエルカムショップ制度」の登録店を協働先候補として決定し、交渉手順、交渉内容、役割分担を決定した。

8月6日午前にコーディネーターが協働先に行き交渉を行い協力同意を得た。その上活動内容について協働先と検討した。

「医療」グループ

7月31日にグループ活動を行い、協働先候補として「医療センター」「校医」「保健所」を選択し、交渉手順、交渉内容、役割分担を決定した。

8月6日午後にコーディネーターが協働先第一候補である「医療センター」と交渉し協力同意を得た。その上で活動内容について協働先と検討した。

3)「体験活動実施・記録」8月26日/27日

「消費行動」グループ

8月26日にモニター学習者2名と「消費行動」グループメンバーで協働先店舗を訪問し、店員にお惣菜の材料やパックへの詰め方を聞くなどのやりとりを実施した。研修会受講者が録音、録画、モニタリング学習者及び担当者からのフォローアップインタビューを実施した。

「医療」グループ

事前にコーディネーターが医療センターを訪問し、体験活動当日モニター学習者と接する担当者に、活動の目的、内容、注意点を説明した。

8月27日にモニター学習者2名と「医療」グループメンバーで医療センターを訪問し、受付、診療、会計、薬局の体験を実施するとともに、研修会受講者が録音、録画、担当者からのフォローアップインタビューを実施した。

(10) 目標の達成状況・成果

本研修会の目的は、①標準的カリキュラム案の理念と方法を理解すること、②連携先と協働で地域に密着した教室の設置計画、教材開発を含む教室準備、教室運営、教室評価、改良ができるコーディネーターと指導者を育成することにある。

この目的が達成できたかどうかは、運営委員による研修会評価、及び研修会以降の教室活動、教材作成の成果により評価する。

①に関しては、以下の評価を受けている点からも達成したと考える。

・研修用資料は『「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について』他4冊の報告書(いわゆる「5点セット」)の要点を抜粋し、今回の研修事業用に有機的に配列し、研修参加者が5点セットを理解することを助け、具体的な行動に移せるよう工夫されている。

また、②に関して、本研修会ではいわゆる座学ではなく、on-the-job trainingの手法をとり、実際に連携先への打診、調整、モニター学習者による体験活動、体験活動の分析にもとづいた教室活動計画、教材作成を行った。

その点についても、以下の評価から十分に目的を達成したと考える。

・研修では、教材作りに向けて、コミュニティにおける諸活動実施やデータ収集を行うために、とりわけ対外的な交渉を行う必要がある。この能力は「行政・関係機関との連絡調整を行っている」(指導力評価項目Ⅱ4.(6)21)に相当するものであり、実体験を通じてコーディネーターの能力を高めることが目指されている。

また、研修会終了後の教室活動として、「消費行動」グループは、成果を反映した形で1月の「豊田の野菜を食べよう」の教室として具体化されている。また、「医療班」が実施した体験活動は、教材化され教室でも有効に活用されている。この点からも本研修会は十分な成果を示したと言えるであろう。

(11) 改善点について

取組の内容

本取組では、協働先と連携しながら地域に密着した教室活動、教材作成を実施する能力を身につけるには、日本語指導者にも教材作成者にもコーディネーターの視点が不可欠であると考え、全ての受講者に対して、コーディネーターの役割も担ってもらった。同時に体験活動にもとづいた教室活動や教材作成を行うためには、教材化に耐えるだけの資料を収集する方法論の習得や技術も必要となる。体験活動においては、全ての受講者が音声記録や画像記録を取る、フォローアップインタビューを実施するなどの役割を担った。上記、成果の部分でも記述したが、この取組は十分な成果を示したと考えられるが、当初の計画の40時間では不十分であったことは否めない。コーディネーターの視点を全ての担当者が持つことは必要であるが、調整の体験学習中心のもの、体験学習の記録、分析中心のものなど、研修会の目的を分けて実施するなどの改善が求められる。



消費行動グループの体験活動・記録



医療グループの体験活動・記録

7. 日本語教育のための学習教材の作成

(1) 教材名称

- ①医療センターへ行こうー内科
- ②医療センターへ行こうー外科
- ③119番通報しよう
- ④ごみについて考えよう
- ⑤防災について考えよう
- ⑥豊田の野菜を食べよう
- ⑦図書館へ行こう

- ・医療センター体験活動文字化資料
- ・図書館体験活動文字化資料A
- ・図書館体験活動文字化資料B
- ・図書館体験活動文字化資料C

(2) 対象 地域在住、在勤の外国人住民(及び外国人住民と接する可能性のある日本人住民)

(3) 目的・目標 教室内において地域住民として必要な基礎知識について参加者が対話を行い、その対話を通して、外国人住民は地域住民として必要な基礎知識と日本語を身につけ、日本人住民は相互理解のためのやさしい日本語についての気づきを促進することを目的とする。

(4) 構成・総ページ数 68ページ

(5) 教材作成会議の開催について

【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題	検討内容
1	平成26年 2月25日 10:00～ 12:00	2時 間	豊田市国際交 流協会	得永 美穂 中村 諭実子	ごみについて考えよう	教材化の方針の確認と教材作成担当の決
2	平成26年 2月25日 13:00～ 15:00	2時 間	豊田市国際交 流協会	小野 則子 古賀 恵美 日下部 玲子	豊田の野菜を食べよう 防災について考えよう 119番通報しよう	教材化の方針の確認と教材作成担当の決
3	平成26年 2月26日 13:00～ 15:00	2時 間	豊田市国際交 流協会	小野 則子 萩原 栄子 得永 美穂 米勢 治子	医療センターへ行こう 図書館へ行こう	教材化の方針の確認と教材作成担当の決
4	平成26年 3月4日 10:00～ 12:00	2時 間	豊田市国際交 流協会	得永 美穂 中村 諭実子	ごみについて考えよう	試作教材の検討・完成
5	平成26年 3月4日 13:00～ 15:00	2時 間	豊田市国際交 流協会	小野 則子 古賀 恵美 日下部 玲子	豊田の野菜を食べよう 防災について考えよう 119番通報しよう	試作教材の検討
6	平成26年 3月5日 13:00～ 15:00	2時 間	豊田市国際交 流協会	小野 則子 萩原 栄子 得永 美穂 米勢 治子	医療センターへ行こう 図書館へ行こう	試作教材の検討・完成
7	平成26年 3月11日 13:00～ 15:00	2時 間	豊田市国際交 流協会	小野 則子 古賀 恵美 日下部 玲子	豊田の野菜を食べよう 防災について考えよう 119番通報しよう	試作教材の検討・完成

(6) 使い方 教材は外国人住民が地域でより良い生活をしていくために必要となる生活上の行為を単位として作成している。まず「やさしい日本語」による外国人市民講座やワークショップ、実践場面における体験活動などを中心とした「イメージをつかむ」「体験・行動する」ステップがあり、それらの体験を日本語パートナーとの対話でふりかえり、学習目標を設定し学習する。最後に、学習成果を紹介することで、地域の担い手としての第一歩を踏み出す。

(7) 具体的な活用例 「ごみについて考えよう」を事例とすると、まず、「イメージをつかむ」段階として、ごみ分別ゲームを行う。次に、出前講座「ごみについて考えよう」を聞き、市内のごみの状況、ごみ分別の必要性などについてメモを取り、日本語パートナーと対話を通して理解を深める。最後に、自治会ではどのようにごみの課題に取り組んでいるかの説明を聞き、地域住民として、今後自分たちに何ができるかを考え、発表する。

(8) 成果物の添付

8. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的

本事業は、豊田市内に在住、在勤の外国人が地域住民として暮らしていくために必要な基礎知識と生活日本語を運用する能力を身につける機会を提供することを目的とする。同時に、それら外国人と接する機会がある日本人住民にも相互理解のためのやさしい日本語を身につける機会を提供し、その機会を通して、日本人住民だけではなく外国人住民にとっても住みやすい地域社会を構築することを目的とする。本事業で運営する日本語教室を「地域住民としてのライフステージを支える生活日本語教室(以下、「地域住民のための生活日本語教室」)」と呼ぶ。

(2) 目標の達成状況・事業の成果

上記の通り、本事業の目標は、①外国人住民が生活に必要な基礎知識と生活日本語を運用する能力を身につける機会を提供すること、②日本人住民にも相互理解のためのやさしい日本語を身につける機会を提供すること、③日本人住民だけではなく外国人住民にとっても住みやすい地域社会を構築することにある。

評価に関しては、運営委員のモニタリング結果、及び関係者のアンケート、インタビュー結果から考察する。

まず、①に関しては、運営委員から以下の評価が示されている。

・この事業では、「行動・体験」を通してことばを学ぶのにふさわしいテーマを選び、かつそのテーマにおける行動が現実的にどのようなものであるのかを、十分に検討し、活動をデザインしようとしている。また、日本の地域社会で外国人が課題を達成するために、日本人とのネットワークを作り、また日本人も経験を共有し、自身のコミュニケーションのあり方を再考する機会を提供しようとしている。このような取り組みは、文化庁の推奨する「行動・体験中心の教室活動」の本質を見据えたものであり、非常に貴重な事例になる。

また、学習者アンケートにおいても以下のようなコメントが述べられている。

・新しい言語を覚える時に“経験”は役に立つと思います。特定のテーマについての新しい言葉を覚えることは自分達の語彙を豊かにします。自分の毎日の生活に役に立つ言葉を覚えることができました。

・日本語を使ってみて、よりスムーズなコミュニケーションができればなあと思うようになりました。

このように、体験活動、活動のふりかえりを中心とした「経験」を重視した今回の事業は、言語の習得だけではなく、学習の動機付けにもつながっていることが示唆される。

また、②に関しては、講座を担当した協働先の担当者から以下のようなコメントをもらっている。

・(講座を担当することは)とても勉強になった。外国人からも日本人からもたくさんの質問が出て、疑問点が明らかになった。不備がわかり改善につなげることができる。

このコメントからも、行政担当者にも「経験」を行うことにより、相互理解のためのやさしい日本語の必要性を感じる機会を提供することができたと考えられる。

③に関しては、救急、防災、ごみの問題を同じ地域に住む外国人住民と日本人住民が教室内で一緒に話すことにより、今後自分たちに何ができるか、何をしなければならないかという意見が提示された。また、公共サービスを利用するという体験活動を行うことによって、教室側から公的機関に対して、外国人の視点からの提言を示すことができた。

(3) 標準的なカリキュラム案の地域での活用について

本事業においては、カリキュラム案の骨子となる言語に対する考え方、及び言語習得についての考え方を研修会の最初にも全員で討論した。カリキュラム案を地域で活用するためには、教材作成者、日本語指導者にも、地域内のリソースを活用し、連携体制を構築していくコーディネーターの視点が必要になる。そのためには、誰が、誰に、何のために、どのように行動するのか、どのような状態を目指して活動するのか、の理念の共有が不可欠であると考えたからである。

これを行うことにより、最初に担当者の共通理解を構築することができた。

(4) 地域の関係者との連携による効果、成果等

本事業を実施するためには、地域の関係者との連携体制構築が不可欠であり、今年度は、それに非常に重点をおいた。その結果、ほとんどの教室活動に地域の関係者が講師やワークショップ担当者として協力してくださり、また、学習者を連れての体験活動にも快く応じてくださった。その結果、外国人住民はこれまであまり意識していなかった行政サービスや生活に必要な基本的知識に触れることができ、知識コミュニティの担い手として意識も生まれてきたのではないかと考える。また、日本人住民や行政員にとっても、さまざまなサービスや制度を外国人住民の視点で見直すことができたことは今後の改善に非常に役立つと考える。

(5) 改善点, 今後の課題について

上述したように、本事業においては当初の目標を達成することができ、初めての取組としては大きな成果を示すことができたと考える。

しかしながら、教室参加者人数や教室数からもわかるように、この事業に参加し、継続したものは地域の住民のうち、わずかな人数でしかない。

事業としての教室を継続的に開講し、参加者を維持するためには、日本語教室が地域社会の存在として、自治会や子供会のように、当たり前で、かつ不可欠な存在であるという認識を持ってもらう努力を続けなければならない。そのためには、住民が参加しやすい時間帯、場所で、かつ学習意欲の継続するテーマを考えていく必要があるだろう。